

## 《lieu commun》の意義

村山紀明

言語によるコミュニケーションの問題を、ジャン・ポーラン<sup>1)</sup>の言語観から見ることにしたい。かれの文章は難解ではあるが、『ロベール大辞典<sup>2)</sup>』の用例に取り入れられる類の「高尚」な文体である。かれにとっては、プルースト同様、「文体は巨匠のワニス<sup>3)</sup>」なのである。『タルブの花あるいは文学における恐怖政治』の叙述もそれにもれない。われわれはポーランの言語観の一端を探り、それは文学史的にいかなる位置にあるのかを検討してみたい。

『タルブの花』は「言葉」という厄介な問題をあつかっている。

「言葉について考える作業が、いかに一つことを考え、乃至見つけたと信ずると、その場ですぐ反対のことを見、考えなければならないしごとか […]」<sup>4)</sup>

『タルブの花』の構造自体が上のような困難さをもっている。「ある命題をとりあげるときには必ずその反対命題の価値をも発見させずにはおかない<sup>5)</sup>」ような表現の二重性をわれわれは『タルブの花』の随所に見出す。かりに、「文学」を除外して「言葉」の問題を考えたとしても、つぎのような難問にぶつかる。それは、「言葉」の研究は、「対象化される言葉と、対象化する言葉によって成り立っている<sup>6)</sup>」という宿命を負わされているということ。これら二種の言葉を截然と区別することの困難さが、かれによって夙に指摘されている。

「あたかも言語の純粋な観察などというものはありえないのであり、物の姿を反映し合ういくつもの鏡のような作用によって、言語に近づくわれわれの動きの反映そのものがつねにこの言語(と文学)の中に映しだされるものであるかのよう<sup>7)</sup>」

このような問題をとり扱うにあたり、かりに言葉を「文学言語」と「日常言語」とに分けて考察してゆく。『タルブの花』で問題となっている「文学言語」は「非文学言語」に比べてそれ相応の独自性を持っているからだ。

日常言語においては、「話し手と聞き手とのあいだでメッセージが交換されコミュニケーションが行なわれ、 […] 実在するのは話し手と聞き手との二項だけであって、メッセージはといえば、二項間のコミュニケーションの実践が達成されれば、あとに何ものも残さず消えてゆく<sup>8)</sup>」と考えられる。ここにおける言葉とは、ヴァレリーの言う「みずからを無用化するために発動されるコトバ<sup>9)</sup>」であり、サルトルの言う「道具としての言葉<sup>10)</sup>」であるとも考えることができよう。これに反して、文学言語においては「実在する者としての話し手や聞き手など、どうでもよい<sup>11)</sup>」のである。日常言語における発信者—受信者との関係と、文学言語におけるそれとは様相を異にしている。文学言語においては、「メッセージの送り手と受け手とが両義化され、空無化され […] メッセージそれ自体は否応なく自立化され実在化される<sup>12)</sup>」という事実が認められる。

「言語の両側におかれた作者と読者、話し手と話される者とは一つづれ織りの壁掛けを製作中の職人とその愛好家がそうなるように、一お互いの姿がさかさまに見えるようなことが起るのである。<sup>13)</sup>」

日常言語においては、明示性<sup>14)</sup>への傾向が大であるのに反し、文学言語は、これを消去し、「言

語場からの言語の能うかぎりの自立化<sup>15)</sup>」をめざしている。前者は、「現実の一部をなし、現実を反映する<sup>16)</sup>」のに対し、後者は「現実を再構成<sup>17)</sup>」する。それゆえ、文学言語は、個と普遍とを同時に指示することができるという言語の両義性を可能な限りおしすすめて利用するものだ<sup>18)</sup>ともいえる。

ところで、ブランショは言葉は三重の存在を持っているとする。すなわち、①メッセージの伝達が終わるとともに消えさるところのもの、すなわち消滅するために存在するもの、②物を出現させるために存在するもの、③物を出現させたままに保つために存在したり消滅したりし続ける場合—以上のように分類する。<sup>19)</sup> 言うまでもなく、①から③に進むに従い、その性質は日常言語から遠ざかってゆく。これをあてはめるなら、ポーランは文学言語を③に近いものとみている。『タルブの花』でポーランは文学における「恐怖政治」という概念を示している。そこで、言語の使用にあたってなによりも魂の極端な純粋さを重視する文学者たちを「テロリスト」と命名する。<sup>20)</sup>

「恐怖政治は一般に観念の方が言葉よりも、価値があり、精神のほうが物質よりも価値があると認めるといことである。[...] 言語は思想にとって本質的に危険なものであり、見張っていないと絶えず思想を抑圧しにかかるものだと規定することである。<sup>21)</sup>」

言葉嫌いの恐怖政治はポーランの論難の対象である。「作家が自己を露わし、人間が顔をのぞかせている<sup>22)</sup>」欠陥をもつ作品をほめたたえるサント・ブーヴの批評は当然ポーランの槍玉にあげられる。ポーランは、「言葉であるものは思想でないし、思想であるものは言葉ではない<sup>23)</sup>」というような一元的認識を断固として拒否する。ブランショが指摘するように、ポーランにおいて「語のつながりはすべて何らかのことを意味しており、言語的な全体はすべて思考の面を持っている<sup>24)</sup>」と考えられるのである。文学作品には、「考えられはしない」が「言うことができる」ものが存在しているといえよう。『タルブの花』の冒頭はそのことを語っている。<sup>25)</sup>

ポーランは『タルブの花』で、恐怖政治と修辞派という対立を描く。そして、「すべての文章には、ある神秘を宿すのに充分適した秘密の仕切り枠がある<sup>26)</sup>」とのべていることから察せられるように文学作品におけるレトリックの本質的な重要性を指摘している。

一般的には言語表現とレトリックの関係はいかに考えられているであろうか。

「レトリックは言語に関する学であるが、言語と思考とが一つのものあるいは不可分のものである限り、レトリックもまた思考の学の一つとみられてよいはずである。[...] レトリックは[...] 言語文章の上のたんなる装飾、美化の術ではない。<sup>27)</sup>」

また、ルソーは言語の起源を考察したとき、言語にはもともとレトリック性があったとする。<sup>28)</sup> このように、レトリックは、言語活動と極めて本質的な箇所結びついている。

ところで、ドゥルーズのブルースト論<sup>29)</sup> においては「意味」の問題が後退し、重要なのは、『失われた時』というテキストがどのように動き、何をいかに生産するかということが骨子になっている。ブルーストは、自分の書物を外を眺める双眼鏡としてわれわれに与え、もしこの双眼鏡でよく見えないならば、ほかのものを使うようにわれわれに示唆している。<sup>30)</sup> これは記号重視の文学観である。これとは逆に、恐怖政治は、言葉が「意味」だけでしかなくなればいいといった望みを抱いて「記号」を追放しようとする。しかし、ポーランによれば、文学言語においては、思考（意味）と語（記号）は不可分のものなのである。

「思想というものは、どんなに微妙なものであっても、その表現を求めないようなものは一つも存在しない。<sup>31)</sup>」

ここで、ソシュールの〈シニフィエ〉と〈シニフィアン〉を表す比喩を思いうかべてみよ

う。

「二つの無定型な塊の譬えとして、水と空気を考えてみよう。気圧が変われば、水の表面は一連の単位へと分解される。これが波である。これは空気と水の間中に介在する連鎖であって実質を形成しない。この波動が二つの結合を表し、言ってみれば、思考と、それ自体は無定型生産の連鎖との合作を表している。二つの組み合わせが、一つの形相<sup>フォルム</sup>を生み出すのである。<sup>32)</sup>」

思考と表現との関係は、ポーランにとって上の比喻のようなものである。

さらに、ポーランは、言語がもつ〈有限な手段(単位)を無限に使用する<sup>33)</sup>〉という特徴を指摘している。その典型例が、『タルブの花』に頻出する「常套句」(lieu commun)である。平凡な表現の中に無限の内包を見いだしてゆこうとするのである。

「(常套句を特徴づけている […] 一性質があるとすれば、)それは常套句が殊更に二重あるいは四重の解釈を許す不安定な変化しやすい表現であり、言語の怪物、省略の怪物ごときものだということである。<sup>34)</sup>」

言語コードの「ゆるさ・開放性<sup>35)</sup>」という特性を逆手にとって、言語表現の豊かさを引き出すことが可能となるのである。言語において、意味の相互転換<sup>36)</sup>が生じるのであって、具体的な使用が失われたところに精神的使用に転用されるということはしばしばおこりうる。言語の脱現実化は「モノゴトとコトバとの直接的な関係をたちきること<sup>37)</sup>」によって可能となるのである。常套句ひとつをとっても理解せられるように、レトリックは言語表現の本質をなすとポーランは考えるのである。

「思想か、事物か、あるいは言語かに属していないようなものは何ひとつこの世には存在しない。<sup>38)</sup>」

ここから、文学言語の存在価値が生まれる。言うまでもなく文学言語は、個人の奥底に眠っているもの、社会の片隅に横たわっているものに〈声〉を与える。文学言語への信頼は、思考を表現するための必要不可欠な条件であり、その障害とはならないとポーランは考える。『タルブの花』は、まことにレトリックを縦横無尽に駆使した、文学言語によるコミュニケーションを実現させるものとしてわれわれの前に提示されている。ポーランのように、作家にとって本質的なものが言語そのものにあるとするならば、あらかじめ決められた主題などというものは考えられないことにもなるであろう。

「本質的なものは言語そのものなのである。 […] 書くということはあらかじめ存在する知識を伝えようとするのではなく、言語を一つの特異な空間として探索しようとすることなのである。<sup>39)</sup>」

さらに、このようなポーランの〈言語〉への傾斜は、バルトの「フローベールから今日に至るまでの全文学は、言語についての問題提起となった<sup>40)</sup>」というテーゼに通じるものがある。マルメの詩的言語の構築は、「普通は手段であるところの技術を目的とする」という方向に徹底していくのである。<sup>41)</sup>

『タルブの花』が「私は何もいわなかったことにしておこう<sup>42)</sup>」という言葉で終わるのは象徴的である。『タルブの花』というテキストは、ブランショのことばをもじって言うならば、「ひとたび消えても、存在しつづけ消滅しつづけて、事物をまぼろしとしてでも出現させ、すべてが虚無の中に沈むのを防げようとする<sup>43)</sup>」ひとつの「文学機械」といえようか。

また、20世紀に入ってから、フーコーその他の哲学者たちによって〈言語そのもの〉という意識が指摘されるようになった。たとえば、バルザックのバルザックたる所以は、かれの小説が「新しい言葉として登場したことであり、今だに読まれているとすれば、それはかれの言葉が新しい言葉たるを止めない<sup>44)</sup>」ところにある。敷衍するならば、「可能な現実を現実のものとして提示す

る構成的なもの<sup>45)</sup>—すなわちポーランのいう《語の威力》が文学作品の根底を支えているのだ。「よりいっそう直接的な独創性というものがあるが、それは主題よりもむしろ表現によるところのものである。<sup>46)</sup>」

作品の本質は、思想内容の要約ではないという自明の理を再確認しよう。テキストのもっとも重要な起源は〈言語そのもの〉なのである。なぜならば、テキストは、作品のモチーフによって生まれるが、読者はそれを知ることなしに、テキストを読み、その構造のなかから作者のモチーフを読者なりに想定する。それゆえ、作者の意図しなかった意義がそこに生じうる<sup>47)</sup>からである。

「作者の思想は読者の言葉、作者の言葉は読者の思想。<sup>48)</sup>」

そこに存在するのはテキストの構造そのものであり、その構造は言葉以外のなにものによってもつくりだされていない。作者と読者の無数の組み合わせから生じるあらゆる可能性をうちに秘めた文学の言語—それが「文学」という現象の一切の根本である。以上のように、『タルブの花』は〈文学における言語〉という普遍的な問題に一石を投じている。

上のようなポーランの言語観は、当時の言語不信という危機的文学風土に対峙する一種の反動から生まれたのではないか。

ポーランは、恐怖政治をいかなる作家に見ているか。その嚆矢はランボーだ。

「だが、それはまだ恐怖政治が常に抱えている郷愁すなわち無垢の直接的な言語、そこにおいては言葉が物に似ており、どの言葉も呼びだされ、どの語も『あらゆる意味に通じる』ような黄金時代という固定観念でもあるのだ。<sup>49)</sup>」

上の、《accessible à tous les sens》という句はつぎのランボーの言葉をさす。

「いつの日か、すべての感覚に通じる詩的言語を発明するのだと思ひこんだ。(強調筆者)<sup>50)</sup>」

20歳で詩作の筆を折ったランボーの『地獄の季節』の次の箇所—「今となつては芸術は愚行であると言える。<sup>51)</sup>」そのようなランボーにとって、もう言葉は無用であり、「おれは話すべを知らない<sup>52)</sup>」のだ。今こそ、自分を呪縛していた悪魔すなわち文学という《verbes》(言霊)を払いのけなければならないのである。

上のランボーの「あらゆる意味に通じうる詩的言語」という表現の裏を返してみるならば、現在はそのような理想的な詩的言語は存在していないということになる。のちに、シュールレアリスムの詩人たちはランボーの「詩的言語」を追求してゆく。ポーランは、ランボーのいう理想の言語はどこかよそにあるのではなく、むしろそれはわれわれ自身のうちにあるとする。

「だが、しかし、それを手に入れることができるかどうかは、一にかかってわれわれ次第なのである。<sup>53)</sup>」

われわれ自身の言葉、とりわけ常套句という場において「われわれは言語の創造の執拗な試みに立ち会っている<sup>54)</sup>」のである。

ポーランにとって、ランボーはまだ恐怖政治の嚆矢にしかすぎないが、ベルクソンは、恐怖政治の理論的完成者と映るのである。ベルクソンが同時代の文学に及ぼした影響は大きい。かれの、「言葉」に対する否定的評価は、『時間と自由』の序文に端的に表現されている。<sup>55)</sup>かれは、言語は「心理的事実を表現するには不適當であり日々にあたらしい人間の経験的事実を、既存の、容赦のない、非個性的な、概念と単語の框の中に押し込めてしまうもので、言語は具体の中に抽象を、本質的に連続性を有するものの中に不連続を、絶対的に独自のものの中に一般性を、導入する性質をもっている<sup>56)</sup>」とする。しかし、かれも言葉を用いざるを得ない。そこでかれは言葉の

論理展開に頼るのではなく、比喩を巧みに用いてわれわれの想像力に訴えようとするのである。かれは、内的生命の発現たる持続である、のがれやすく私的で独自の精神を、固定した共通の抽象的な物質（言葉）で表現せざるを得ないとする。<sup>57)</sup> 修辞派・ポーランにとってはこのような、精神を言葉の上におくベルクソンの言語観は作家にとってもっとも危険なものと思えるのである。

「ベルクソンの言うところを信ずれば、われわれの内面生活なるものは、そのもっとも貴重なものを途中で放棄してしまわずには表現にまで到達することがない。精神は各瞬間ごとに、言語に抑圧されているのだという。<sup>58)</sup>」

もしそうならば、文学の成立基盤自体が危いものになるのではないか、とポーランは痛烈に批判する。さらに、かれはベルクソンの、詩的言語に対する見解を論難する。ベルクソンは言葉が詩人に課する障害についてつぎのようにのべている。

「厳密に言葉によって表すことのできる喜びや悲しみの下に、[詩人は] 言葉とは何ら共通するものをもたないあるもの、もっとも内奥の感情よりも、もっと人間にとって内的な、生命と呼吸とがもつある種の律動を把握するのである。<sup>59)</sup>」

しかし、実際は、思想を抑圧する当のその言葉が、内なる生命と呼吸とがもつある種の律動を表現しているのだとポーランは主張する。かれの言語観の立脚点はベルクソンのそれとは対蹠的な地点にある。ポーランの根底には言葉（表現）にたいする絶対的信頼がある。

「ともかく、一切の言葉が表現だということに同意してもいい。だがその表現なるものが、いずれにしてもわたしの言わんとすることを減少することになるなどということは全く理解できないし、また事は全くその反対なのである。<sup>60)</sup>」

ポーランは、ベルクソンが〈言葉を越えて〉いるとあって賞賛する哲学者が一人ならずいると言っているが、その越えたところのものを言葉で扱うことから始めるとすれば、その賞賛からはいったい何が残るのか<sup>61)</sup> と、ベルクソンの矛盾を鋭く衝いている。

さらに、かれと同時代のサルトルもテロリストとして論難されている。サルトルは、〈engagement〉という観点から〈文学の有効性〉を問題とし、のちの「飢えで死んでゆく子供を前にして『嘔吐』は何の役にも立たない」という文学無用論も〈langage-instrument〉に立脚している。また、サルトルは散文と詩的言語を峻別する。かれは、ランボーの《Ô saisons ô châteaux! Quelle âme est sans défauts?》を引用し、ランボーは、絶対的問いを作りあげ、《âme》という語に疑問形の存在を与えたのであって、ここに物となった問いがあり、それはもはや意味ではなく実体である<sup>62)</sup> とする。このように、散文、詩いずれの場合にせよ、サルトルの言語観は言葉かさもなくば物かのどちらかにしなければやまない典型的な恐怖政治の相を表しているのであって、ポーランの、言葉と物とを可逆的な関係のうちに見る言語観とはあいられない。

ところで、パランの場合は以上三者とは微妙に異なった形で、ポーランの言語観と対峙している。ポーランは『タルブの花』の「おしの人」という章でかれの友人でもあるパランに言及している。

「それは、いわゆる休暇兵士の沈黙とでもいえるようなものである。誰でも知っていることだが、1914年の兵士たちが休暇の許可をえてわが家に帰ってきたとき、彼らはみなおしのように黙りこくっていた。<sup>63)</sup>」

休暇兵士たちが言葉を使おうとするやいなや、言葉はかれらを裏切ってしまう。言葉は発せられた通りには理解されないのである。端的に言うと、戦争体験の《l'incommunicabilité》が問題

となっている。パラン自身1916年から1918年にかけて前線生活を送り帰還する。これは、かれの、言語研究の思索の出発点ともなる重大な体験である。かれによれば、言語に対する不信はかれ自身の発明ではなく、われわれの文明全体から注ぎこまれたのだ<sup>64)</sup>、となる。サルトルは、パランのこの、言語不信の一背景として上の戦争体験に加え、パランが農村出身者であることもあげている。

「農民は自然の力のなかで、ひとりで働く。かれらは行動するのに名づける必要はない。かれは黙るのだ。<sup>65)</sup>」

パランは兵役から帰還後高等師範学校に入学し、そこでレトリックを自在にあやつるすべを会得する。そして高度の抽象的な主題を論じることになる。しかし、パランが紡ぎ出すそれらの言葉はかれにとって何の重みもない。議論のための言葉でしかないのである。パランは再び沈黙にひかれる。

「『よくわかっているときは黙っているものだ』とかれは言う。<sup>66)</sup>」

かれはひとつのエピソードを『言語の本性と機能についての探求』で書いている。

「私の娘が私にむかって、実は宿題をしなかったのに自分は宿題をしてしまったというとき、この嘘言は私を誤謬におとし入れるために、すなわちその意図でもって言われたのではなく、むしろ、彼女は宿題をしようと思えばすることができたということ、彼女は宿題をしたいという気持を持っていたこと、彼女は宿題をすべきであったこと、そしてこれらすべてはたいして重要な意味を持たないこと、を私に言おうと思っていたのである。それゆえ、この嘘言は、虚偽を語るためというよりは、むしろ困った事態を切りぬけるためになされたのである。<sup>67)</sup>」

したがって、パランにおいてはいわゆる〈嘘〉は存在しないのである。サルトルはパランのその考えを要約して、「嘘をつくとは不可能な真実の表現をあきらめることだ<sup>68)</sup>」と述べている。復員兵パランが、都会と銃後で獲得した言葉は自己の真実を表現するものではどうもいり得なかったのである。かれは、25歳のときに「記号によって成り立つ人間同士の意思疎通は不完全なものであり、ぐらぐらしたハンドルのように〔怪しげに〕社会関係を調整する<sup>69)</sup>」と書いたときから言語にたいしてずれを感じていたのである。かれは、それを「言語の不正確さの目眩めく感覚<sup>70)</sup>」と名づけている。パランはこの、言語に対する不信の念を解消しようとして後にボルシェビズムという実践に身を投じるがそれも失望に終わる。そこでパランは三度目の沈黙に陥る。この沈黙を、サルトルは、最初の〈下部一沈黙〉に対して〈超一沈黙〉と名づけ<sup>71)</sup>、パランは神の側へおもむいたとする。いずれにせよ沈黙を言語の全体性（神）と同一視し、言語の超越性を主張するパランの見解は、ポーランのそれとは方向を異にするものである。パランはつぎのように書いている。

「言語とはわれわれを言語の反対のもの（それは沈黙であり、またはそれは神であるが）の方へと引き寄せるための一つの手段にほかならない。[...]沈黙はわれわれの彼岸にある。言語とは沈黙に通じる推理の道にほかならない。<sup>72)</sup>」

パランは「意志の疎通は不完全である。ただたんに言葉の中に言葉の表現する個人が完全に含まれていないからという理由だけではなく、いかなる言葉、いかなる文章、いかなる作品も、解決の必要もない、有無をいわせぬ必然的な意味を持たないからである<sup>73)</sup>」と考えて、〈言葉の病い〉にとりつかれてしまった。ところが、ポーランは、パランがいう言葉の「不正確さ」を最大限に利用しようとする。その表れが前述した常套句の考察であろう。常套句には〈秘められた見方〉、〈言外の意味の役割<sup>74)</sup>〉があり、それは表現に意味と力を与えているのだ。

「常套句とはいつでも、いかに陳腐なものであっても、それを述べる者によって創りだされたものとなりうるということである。だからそうした場合には、強い新しさの感情すら伴うのである。<sup>75)</sup>」

このように、ポーランの言語観は以上見てきた『タルブの花』でとりあげられている四者にいずれも共通してみられる言語不信に対するアンチ・テーゼとして出現したのである。ただし、パランのそれとのかかわりは単純に反対であると速断はできない。なぜならば、パランが最終的に到達した〈超一沈黙〉とは、マラルメの言う「言語とは対立するものではない、反対に言語の条件であり力である沈黙<sup>76)</sup>」すなわち「語の完成の本質的なしるしとしての沈黙<sup>77)</sup>」に通じるものであるからだ。これは『タルブの花』の「私は何も言わなかったことにしておこう<sup>78)</sup>」に符合しているのである。

## 註

- 1) Jean Paulhan, *Les Fleurs de Tarbes ou la Terreur dans les Lettres*, Gallimard, 1941., 訳文は『タルブの花—文学における恐怖政治』野村英夫訳、晶文選書、1968.による。以下『タルブの花』と略記する。
- 2) *Le Grand Robert*, Paris, 1996.
- 3) Cf. *Lettres de Marcel Proust à Bibesco*, Clairefontaine, 1951, p.174.
- 4) 寺田透「言葉とは…」『岩波講座 文学3 言葉』8頁、1976.岩波書店
- 5) Paulhan, *Les Fleurs de Tarbes*, p.207.
- 6) 竹内成明「現代言語論への批判」『岩波講座 文学3 言語』(前掲書)114頁。
- 7) Paulhan, *op. cit.*, p.162.
- 8) 竹内、前掲書、140頁。
- 9) Paul Valéry, *Oeuvres I*, 《Bibliothèque de la Pléiade》, Gallimard, 1957, p.1325.
- 10) Jean-Paul Sartre, *Situations II*, Gallimard, 1948, p.64.
- 11) 竹内、前掲書、140頁。
- 12) 同書、141頁。
- 13) Paulhan, *op. cit.*, p.109.
- 14) ただし、この機能はEdmund Husserlのいう論理言語《狭義のメタ言語》において、より一層顕著である。(竹内、前掲書、138頁。)
- 15) 竹内、前掲書、139頁。
- 16) 磯谷孝「文学の言語と文化の記号論」『現代思想』青土社、1978、3、174頁。
- 17) 同書、174頁。
- 18) 同書、174頁。
- 19) Maurice Blanchot, *La Part du Feu*, Gallimard, 1949, p.55.
- 20) ジャン＝ポール・サルトル『シチュアション』人文書院、1965、佐藤朔他訳、157頁、以下訳文は同書による。
- 21) Paulhan, *op. cit.*, p.64.
- 22) *Ibid.*, p.46.
- 23) *Ibid.*, p.111.
- 24) Blanchot, *op. cit.*, p.52.
- 25) Paulhan, *op. cit.*, pp.9-10.
- 26) Paulhan, *Clef de la Poésie*, Gallimard, 1944, p.48.
- 27) 三木清『哲学ノート』河出書房、1954、102頁。、宇波彰「現代言語論のひとつの方向」『岩波講座 文学3 言語』(前掲書)、101頁。
- 28) 宇波、前掲書、102頁。
- 29) Gilles Deleuze, *Proust et les signes*, P.U.F., 1964.

- 30) Cf. Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1989.
- 31) Paulhan, *op. cit.*, p.23.
- 32) R.Engler, *Théorie et critique d'un principe saussurien:l'arbitraire du signe*, CFS21.,丸山圭三郎『ソシュールの思想』岩波書店、1981、209-210頁。
- 33) 竹内、前掲書、146頁。
- 34) Paulhan, *op. cit.*, p.139.
- 35) 竹内、前掲書、149頁。
- 36) 竹内好、藤田省三「レトリックとは何か」『岩波講座 文学3 言語』(前掲書)、188-189頁。
- 37) 外山滋比古『ホモ・メンティエンス』みすず書房、1971、参照。
- 38) 野村、前掲書、222頁。
- 39) Jean Ricardou, *Problèmes du nouveau roman*, Seuil,1967.,『言葉と小説—ヌーヴォー・ロマンの諸問題』野村英夫訳、紀伊國屋書店、1969、20頁。
- 40) Roland Barthes, *Le degré zéro de l'écriture*, Gontier, p.8.
- 41) *Ibid.*, p.9.
- 42) Paulhan, *op. cit.*, p.168.
- 43) Blanchot, *op. cit.*, p.31.
- 44) 磯谷、前掲書、177頁。
- 45) 同書、176頁。
- 46) Paulhan, *op. cit.*, p.31.
- 47) 磯谷、前掲書、183頁。
- 48) Paulhan, *op. cit.*, p.109.
- 49) *Ibid.*, p.142.
- 50) Arthur Rimbaud, *Œuvres complètes*, 《Bibliothèque de la Pléiade》, Gallimard, 1972, p.106.
- 51) *Ibid.*, p.171.
- 52) *Ibid.*, p.115.
- 53) Paulhan, *op. cit.*, pp.142-143.
- 54) *Ibid.*, p.89.
- 55) Henri Bergson, *Essai sur les Données immédiates de la Conscience*, P.U.F., 1927, p.VII.
- 56) 平井啓之『ランボオからサルトルへ』清水弘文堂、1968、65頁。
- 57) Paulhan, *op. cit.*, p.70.
- 58) Paulhan, *op. cit.*, p.58.
- 59) *Ibid.*, p.58.
- 60) *Ibid.*, p.71.
- 61) *Ibid.*, p.112.
- 62) Sartre, *Situations, II*, p.69., Rimbaud.*op.cit.*, p.111.
- 63) Paulhan, *op. cit.*, p.22.
- 64) Sartre, *Situations, I*, p.180., Cf. Brice Parain, *Essai sur la misère humaine*, Grasset, 1936, p.158.
- 65) Sartre, *Situations, I*, p.180.
- 66) *Ibid.*, p.182.
- 67) Parain, *Recherches sur la nature et les fonctions du langage*, Gallimard, 1942, p.170., 訳文は三嶋唯義『ことばの思想史』1972、7、大修館による。
- 68) Sartre, *Situations, I*, p.185.
- 69) Cf. Parain, *Essai sur la misère humaine.*, Sartre, *Situations, I*, p.177.
- 70) Sartre, *Situations, I*, p.178.
- 71) Sartre, *Situations, I*, p.212.
- 72) Parain, *Recherches sur la nature et les fonctions du langage*, pp.172 et 176.
- 73) Parain, *Essai sur la misère humaine*, p.226.
- 74) Blanchot, *op. cit.*, p.63.
- 75) Paulhan, *op. cit.*, pp.85-86.
- 76) Blanchot, *op. cit.*, p.71.
- 77) *Ibid.*, p.68.
- 78) Paulhan, *op. cit.*, p.168.